

---

# タケナラシ

井上讃恥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

タケナラシ

### 【Zコード】

Z8624A

### 【作者名】

井上讚恥

### 【あらすじ】

生まれつき顔と腰が歪んでいる少年ロクは、村のはずれで、お爺とお母と暮らしている。ある日ロクは、裏のヤブにタケナラシという恐ろしい妖怪が居ることを知る。ロクはタケナラシが鳴らす竹の音に魅入ってしまい…

ワシン家は、山の麓の、村からひょっとだけ離れたところにあるんだが、表の畠で野菜はよひ採れるし、裏のヤブでは山菜やら茸やら獸やらがよひ獲れるし、すぐそばの川はものすじう綺麗で、魚もある。ワシのお父は死んでいやんが、お爺とお母がおるし、なんも不自由はない。悪いことなんぞ何ひとつない。

今日もお爺とヤブに茸やらを狩りに行つた。お爺はもう年で腰は曲がつとるが、険しい山をすうこすこと泳ぐみたいに進んで行く。

「おひにロク、お爺は行くぜ。はよ来んか、のりまが。」

「ワシはロクこひ、この夏で七つになる。村の子供は学校に行きよる年やが、ワシは学校には行けんらしい。この腰のせいやと思つ。

なんとかは知らんが、ワシの腰はお爺よりも曲がつとる。顔もちよつと歪んだる。ワシが立つて歩く頃にはもつ腰が曲がつとつたらしく。お母がそういうのつた。それで歩くのも遅いし、すぐにこける。

お爺はいつもみたいに「のりまが。」いいながら、ワシに会わせて止まりながら歩きよる。お爺はいつもみたいに、ワシを面倒くさそうに振り返つては、ため息やら舌打ちをしよるが、なんも悪い気はせん。こんなワシに会わせてくれよるお爺は優しい。ワシはお爺のことを慕つとる。歩くたびに、背中の籠がぐわんぐわんと揺れる。お爺に追いつこうと大股でぐわんぐわんと歩く。おじき、いつもの竹ヤブに着く頃か。

二つもの竹ヤブ。二つは山の中腹ぐらこのところ。お爺が世

話しどとるから、竹は綺麗に伸びて、並び方が美しい。竹の子の時期はもう済んだが、お爺の竹の子は、身が白くて軟らかくて、高くで売れる。ワシも竹の子は手伝つから、よう売れたと聞いたら嬉しい。この時はお爺とお母も機嫌が良い。そやから、ワシは春が大好きや。

春も好きやが、夏が終わつて涼しいなつてぐる今みたいな季節も好きや。ヤブ蚊を払いながら、お爺の頭を真似して唄つて草を狩つた。

かこおん

向こうの方で、かこおんと竹が鳴つた。竹ヤブに来るたび、いつもかこおんと竹が鳴る。鳥の仕業か、獣の仕業か、風の仕業やうつと、今まで気にもせんかつたが、なんでか今日はほんまのことを知りとつた。百歩ほど奥の方で、腰を屈めているお爺に訊いた。

「お爺やあ、竹がかこおんと鳴るんは、鳥かあ？獣かあ？」

急に強い風が吹いて、わわわわわわあ。と竹の葉が騒ぎ出した。お爺は耳が遠いから、その音でワシの声は聞こえんかつたらしい。返事がほしかったから、背負つて籠を降ろしてお爺のところまで歩いた。ここは地面が平らで足場が良いから、一けずに歩ける。ぐわんぐわんとみぎひだりに揺れながら、やつとこお爺のところまで来た。

「お爺や。竹が鳴るんは何でや。」

お爺はこいつもみたいに、ワシの方を見やんと面倒臭そりこつた。

「タケナラシひやう妖怪や。鳴つたとこに近寄るなや。とつて喰

われるぞ。」

「妖怪の仕業やつたんか。」ワシは独り言をいつて、籠を取りに戻つた。

かあん

向こうの方で、かあんと竹が鳴つた。タケナラシが鳴らしよつた。と声を出さんというて、見たことのない妖怪の姿を思い描いた。背が低くて、竹と同じ肌の色で、髪の毛は赤でオカツパ。竹の子の皮でできた服を着とる。両手には短い竹を持つとつて、美味そうな人間が来よつたら、舌をべろんと出しながら竹を鳴らしよる。とつて喰われるて思うたら恐ろしいが、近くに妖怪があると思つたら、心臓がどんどんといつて、知らん間にワシの顔は笑つとつた。

さつき降ろした籠を背負つて、茸を探してるとお爺に見せかけながら、ワシは笑いながらタケナラシのことばかり考えとつた。竹が鳴るたびに、ワシの心臓はどんどんといつた。

結局、それから茸はひとつも採れんで、うちに帰つてどやされた。けども竹の音が耳にひつといつて、お爺とお母の声はあんまり聞こえんかった。床についてからも、耳の中での不思議な音が鳴つてゐる氣がして眠れんかった。

次の朝早く、ワシは独りで竹ヤブに出かけた。タケナラシのことが気になつて氣になつて、辛抱できんかった。

道中に落した棒を拾つて、いろいろな樹や岩を叩きながら歩いた。色々な音がして面白かったが、あのタケナラシの音よりええ音はせんかった。

ぐわんぐわんとゆっくり歩いて、やつといひ竹ヤブに着いた。そん時、竹の葉がわさわれわあ、とこうたかと思つと、かこおん。と音がした。タケナラシがワシが来たことをわかつたんやないかと思つて、ワシは嬉くなつて、持つとつた棒つきれで、竹を叩いて回つた。せやけど、やつぱりええ音はせんかった。

今度は細い竹の枝を拾つて、竹をこするみたいにしゃかしゃかしゃかと鳴らした。なかなかええ音やつたんで、しばらへりしゃかしゃかしゃかとこすつて遊んだ。

かあん

かこおん

遊んだる途中も時々タケナラシの音がして、ワシはタケナラシと一緒に遊んだる気がして、ほんまにほんまに楽しかつた。

今度は石こりを拾つて竹にぶつけてやつた。

やあ、タケナラシみたいな音がした。これはええぞと思つたが、

ひおん

よう見たら竹に傷がつことつたんで、もういねはせんといつと決めた。

ぐわんぐわんと竹ヤブを歩き回つて、鳴らし回つて、遊び疲れて、腹が減つた。もつとタケナラシと遊んでいたかつたが、家に帰ることにした。

せよつお爺とお母こじやされた。煙の手近にもせんと出で行きよつてからに。役立たずが。といつもみたいに叱られた。せやけどワシは、まだ楽しい気持ちが続いとつたから何とも思わんかつた。今度はいつ竹ヤブに行こいつか考えとつた。

それから、ワシは毎日竹ヤブに行つて竹を鳴らして遊んだ。何がおもひいんやとお爺とお母はワシを馬鹿にしよつたが、竹ヤブで遊ぶのが何をすむよつもおもひかつた。

ある晩、竹が鳴つた氣がして田が覚めた。お爺とお母を起しさんと、おつと家を出た。また竹の音が聞こえた氣がした。タケナラシがワシと遊びたいと言つてゐんやうか。丸こいお母さんの明かりをたよりに、なんべんもこけながら竹ヤブに行つた。

夜の竹ヤブに来るんは初めてやつたが、なんとか怖ろしくはなかつた。お母さんに照らされたヤブは静かで、綺麗で、わくわくした。ワシはこつものように竹を鳴らして回つた。やんわり冷たい風が吹いて、葉がひそひそ話をする中、タケナラシの音が向こいつで鳴つた。

「鳴つたといこなは近寄るなや。とつて喰われるや。」

お爺が囁つとつた。せやけどワシは、何でか音がある方に向かつて歩いとつた。タケナラシに会いたかつた。喰われてもええから、会いたかつた。ワシがおらんようになつても、お爺とお母は何とも思

わんやるつ。もしかしたら喜ぶかも知れん。役立たずでのうまなワシは、妖怪に喰われた方がええかも知れん。

かああん

すぐ近くで音がした。

おつた。

ワシのすぐ田の前の竹のすぐ向いに、小さな影がひょこひょこと動いとる。

ワシはのっしのっしと身を屈めて近づいた。田の前にタケナラシがある。

ワシより少し背が低くて、頭のてっぺんが竹の子みたいに尖つて、からだは竹の子そのもので、大きな足と大きな手がはえとる。からだの真ん中よりちょっと上に顔があつて、まん丸い目には、おつきな口。そこで、ワシとおんなじように腰が曲がつとる。ワシが思つてたのと違つて、竹は持つとらんかつた。まん丸くて赤い目でワシのを見とる。ワシはびっくりしてしもて、力が抜けて尻もちをついた。

タケナラシがあつた。今、田の前にある。こんな嬉しことはないのに、腰がぬけて力がへらん。ワシは口をぽかあんと開けて、竹の子の妖怪を見上げた。

急にタケナラシは両の手をいっぱいに広げて、胸の前で合わせるよひにして手を打つた。

かああん

乾いたあの音が鳴つた。そうか、手を叩いてならしていたんか。

ワシは嬉しくて嬉しくてたまらんで、うわあと声を上げた。



昨夜のことは夢やつたなんか。いいや、夢ではない。寝巻きには土や竹の葉がついた。竹の匂いもある。確かにタケナラシに会つたんや。あの笑つた顔が、ふわつと思い浮かんだ。にたにたと笑いながら朝飯を済ませた。

今日は一日中、畠の手伝いをした。

西の空が、赤く染まり始める。秋の日はつむべ落としこうべ、すぐに日が暮れるらしい。ワシは鍬を納屋に付けたら、竹ヤブ田指して大急ぎでぐわんぐわん歩いた。

またおつた。

待つてくれとつたんか、タケナラシはワシの顔を見るなり、かこおん。と手を鳴らした。

ワシと囁じくらじこ腰が曲がつてゐるにタケナラシは身軽で、早く走ることもできた。でもタケナラシはワシの歩く早さに心わせてくれた。お爺が急かすのと違つて、タケナラシは優しく見守つてくれてるみたいやつた。

一人で竹を鳴らしたり、落ち葉で面を作つたり、かくれんぼをしたりして遊んだ。タケナラシはしゃべらんが、からだの動きを見たら何が言いたいんかようわかつた。

もう日が暮れた。

「また明日な」とこゝで、タケナラシに手を振つた。タケナラシ

は、竹の枝でかしゃかしゃかしゃと竹をこすって、けたけたけたと笑つた。さつきワシが教えてやつたことが気に入つたみたいや。ワシも真似してけたけた笑つた。

暗い帰り道、ワシは考えとつた。

誰かと遊ぶちゅうことがこんなに楽しいもんか。今まで独りで遊んだことしかなかつたが、こんなええことがあるんか。毎日でも竹ヤブに来たいなあと想うて帰つた。

帰つたらどやされるか思つたが、今日は何でか何も言われんかつた。そんで晩飯は今まで食つたことがないくらいうまかった。いつもと変わらん晩飯やつたのに。

次の日も、また次の日も、そのまた次の日も、ワシはタケナラシと遊んだ。

やつぱりタケナラシはしゃべらんが、そんなことはどうでもええ。やつぱりワシの腰は曲がつとるが、そんなことはどうでもええ。そんなことは氣にもならんぐらい、ワシらはワシらだけの遊びをした。

タケナラシは優しかつた。ワシがこけたときはいつも手を貸してくれた。あんまり痛いときは大きな手で抱いて、さすつてくれた。その後は決まってけたけたけたと笑つた。その後ワシは決まってけたけたと真似して笑つた。痛みなんかどつかに行つた。

タケナラシと一緒に居ると、ワシは嬉しかつた。誰と居るよりも嬉しかつた。ワシは誰かに抱かれた憶えがない。負われたこともないと思う。死んだお父はよう抱いてくれてたようやが、あんまり小さかつた時のことやから憶えとらん。せやから、優しくされることなんて生まれて初めてのことやつた。

夜になつたり、「はよ明日になれ。」といつて、雨が降つたり、「はよ晴れになれ。」といった。タケナラシが居りと毎日は考えられんかつた。

幸せゆのせ、じゆごとにとなことやくつだ。

春や。タケノ口を掘る時期になつた。

ワシはタケノ口を掘りとつなかつた。タケナワシはびい通つんやうつか。そんなこと考えて手がなかなか動かん。せやけども、ワシらもメシを食わん死んでまつ。おんなじ命や。いややけどもワシはタケノ口を掘る。

「すまんなタケナラシ。すまんなタケノ口や。おおやくな。」

そりはて、喉の下がすうんとしんじくなるのを辛抱して掘つた。掘るたびに手や足が「動きとつない」と言つてこるよつて、どうにかタケノ口だけを掘らんで済まんやうつかと思こながら掘つた。

じゅうじゅうじゅうじゅん

むいひじおかしな音がした。いつとじお爺の声が聞こえる。ワシは急いでお爺の声がする方へ急いでだ。

お爺が苦しそうな顔をして、足を抱えて唸つてゐる。あつい坂から転げ落ちたみたいや。

足に掘りが刺さつてて、どんどん血が流れてて、お爺の顔が青いような白いような色になつてきた。

助けを呼んだが誰も居やんよつて返事がなー。お爺を抱えてやづを下つよつと思つたが、ワシの力でせどつてもできど。お爺の顔が

もっと白くなつてきて、どうしたらえのかわからんよつになつて、  
ワシは、ワシはもう泣きそつて、何にもできんまま「お爺、お爺」と呼んでいた。

かあん

タケナラシの音がした。

「タケナラシ、助けてくれ。お爺が大変や。タケナラシ、助けてくれへんか。」

ワシがそう言つとタケナラシが目の前に現れて、かこあんと手を打つた。そんだけたけたけたと笑つた。

びしひ。ヒワシの背中の骨に稻光が走つた。力が湧いてくるみたいやつた。

またタケナラシが手を打つたら、もっと力が湧いた。ひよいと軽く持ち上がつた。ワシはお爺を負うたまま走つてヤブを下りた。びつくりするぐらいすいすいと速く走れた。そのお陰でお爺は助かつた。村の医者がようやつたなあとワシを褒めてくれた。ワシは嬉しくてしうがなかつた。

お爺を持ち上げられる気がしたからやつてみた。ひよいと軽く持ち上がつた。ワシはお爺を負うたまま走つてヤブを下りた。びつくりするぐらいすいすいと速く走れた。そのお陰でお爺は助かつた。村の医者がようやつたなあとワシを褒めてくれた。ワシは嬉しくてしうがなかつた。

もっと嬉しかつたのが、腰が真つ直ぐになつたことやつた。顔も歪んじつたのが整つた顔になつて、お母もたいそう喜んじつた。

仕事もおとなみたいにできるようになった。学校にも行かしてもらえるようになった。村の子らも遊んでくれるようになった。ロクやん、ロクやんというて慕ってくれた。ワシは村の皆が好いてくれるワシになった。動けんようになつたお爺の分も働いた。子どもらを集めて遊んだ。ワシは村の誰もが好いてくれるワシになった。タケノ口の時期が終わつて竹ヤブにも行かんようになつた。あれから姿を見せんようになつたタケナラシのことも、もう呼ばんようになつた。それでもワシはしあわせやつた。

また秋が来た。タケナラシと初めて会つた秋。

また草を採りに竹ヤブに来た。竹をしゃかしゃか鳴らしたり、手を打つたりして久し振りにタケナラシを呼んだ。せやけどなんの返事もなかつた。

「 もうワシのことは忘れてしもつたんぢゃね。 」

そう思つて、すいすいと竹の間をくぐりながら草を採つていつた。

何べんもやぶん中を見回してみるが、おるのはだいたい虫ぐらいで、妖怪の姿はどこにもない。あの「かあん」ぢゅう綺麗な竹の音もせん。

草を採つては顔をあげ、竹の間を縫つて向こうの方をぐるりと見渡す。そんな悠長にしとるもんやから、籠の中の草はなかなか増えん。また草を採つては顔をあげ、竹の間を縫つて向こうの方をぐるりと見渡す。

「 もうワシしてこぬつちに籠が一杯になつた。 」

「薄暗うなつてきたし、もつ帰るか。もつ帰ひへ。」

竹ヤブの隅まで響くぐらい大きい声で独り言を言った。声はするすると奥の方へ消えていった。今まで騒がしかった虫の音が消えて、しいんとヤブが静まつた。ワシは田をつむつてみた。

その時、奥の方で竹の音がしたような気がした。「かあん」というあの音やつたんかどうなんかはようわからんが、何となくそんな気がした。ワシはもうこっぺん「もう帰る。」と、小さい声で言ってみた。音が聴こえるような気もせん。

「気のせいやつたかなあ。せやけど氣のせいやないかも知れんなあ。」

また大きい声で言いながら奥へ進んで行つた。

ほんの少し歩いて、すぐ田の前。

一本の曲がつた竹を見つけた。

すぐにわかつた。

「タケナラシ。」

呼んでもひとつも動かん。喉の下がすうんとしんじくなつた。

お爺の足はだいぶよくなつて、畠仕事ぐらこやつたりワシの手は  
いがなくても出来るよくなつた。ヤブまで行くのはまだしそう  
みたいやから、ヤブのことはワシが全部やるこになつとる。全部  
やることになつたが、ほんまはヤブに行つてただけでヤブの世  
話なんがひとつもしどらぶ。ワシがやることはひとつ。  
じいんとこはすつとタケナラシの竹の前で話をしとる。朝から晩  
まで。タケナラシの周りをぐるぐると回つてあたり、タケナラシに  
もたれて口笛を吹いてみたり。

「タケナラシが助けてくれてからワシは人氣もんになつたんやぞ。  
むつじの村で除けもんこされとんやうじもはおりん。みな仲良つ遊ん  
どぶ。お前のお陰やぞ。」

と、言つてみると、何の返事も無い。やわらかと葉つぱが揺れる  
こともない。

「なんやお前、怒つとるんか？」

と、言つてみると、何の返事も無い。わざわざと葉つぱが揺れる  
こともない。

「どないしたんやー、タケナラシー。」

搔つてみると、が向の返事も無いし、かつと葉つぱが揺れるこもな  
い。やんなことを向日も繰り返しつる。なんでタケナラシは何も言  
わんのやうや。

「田はなんですかといふと答えるが、こつもすぐに口元とを離こつ

く。

いいや、それは考えたらあかんのや。タケナラシは疲れて寝てるだけなんや。間違いない。

じこまでヤブを放つたらかしにじとつたもんやから、さすがにお爺も気がついたみたいや。前みたいに、ため息やら汗打ひやらをしよつひゅうするようになつた。ワシの腰も前みたいに曲がってきた。ワシのことを褒めるもんは誰もおらんようになつた。それでもワシは毎日毎日ヤブへ出かけた。

だいぶと寒くなつてきた頃のある朝、ワシはタケナラシの竹に稻のようなもんがぶら下がつているのを見つけた。これは一体なんやろうかと頭を捻つた。

どじかで聞いた覚えがある。

そう言えばお爺が言つとつた。竹は百年にこつぺんぐらい花をつけて、その花が終わつたら枯れてしまひんや。と。ちゅうことは、

もうじきこの竹も枯れて、枯れてしまひんか。

そうか・・・。

枯れてしまひんか。そうか・・・。

そう思たら腹わたを驚撃みこされたみたいに茹しつくなつた。血の気がさあと引いてふらふらとなつたかと思うと、そのままワシはへたりこんで、終いに横になつた。空を見上げれば、竹の先が雲に届

きをやつた。もしかしたらもう刺さってるんかも知れんな。と、わけのわからんことを考えて、沢山雲が流れしていくのをぼけつと見とつた。

夕暮れの朱くて黄色い色が竹を染めている。ゆっくりかぶさつてきた大きな黒い雲が、それを塗りつぶそうとしている。ワシは立ち上がつて、ヤブの湿つた匂いを思いつきり吸つた。そんで両手を目一杯横に広げて、息を思いつき吐きながら、勢いをつけて手を打ち鳴らした。

「ぺんつ。」

情けない音がした。

なんとか涙が出てきた。

タケナラシと初めて会つたあの晩、目の前で手を打ち鳴らした姿が思い浮かんだ。けたけたけたと笑うあの顔が思い浮かんだ。ワシを助ける為に小さくなつて消えてしもたタケナラシは、曲がつた竹になつてしまつて、今にも枯れようとしている。

ワシは、なんべんもなんべんも手を打ち鳴らした。なんぼでも流れてくる涙も拭かんと、ぺんぺんと情けない音を鳴らして歩き回る。曲がつた竹の周りをいつまでも廻る。脚は虫に咬まれて血だらけで、手は腫れあがつてびりびりする。眼は開けてもつむつても痛い。きっとタケナラシみたいに赤くなつてゐるやつ。

空が真つ暗になつた頃、打ち合わせた掌に氷の粒が挟まつた。さつきの黒くて大きい雲がぎょくさん雪を降らしてきよつた。

足の裏から頭の先まで氷の冷たさが凍みて、そのせいで胸が苦しいのも全部わからんようになつてくるような気になる。ワシは枯れ

そうなタケナラシをそこに置いて、家へ帰ることにした。また雪がやんから来たらええんや。ワシの涙はもつやんだぞ。

「けながら、けながら、ぐわんぐわんと下つて帰る。だんだん雪が積もつてきて動けんようになりそつやつたけども、曲がつたからだを揺らしながらやつとこさ家の前に着いた。やつとあつたかい晩飯を食つて床につける。そないに思たら腰が抜けて『』の前で倒れてしまだ。

お爺を呼ぼうと思て口を開いたけども声が出ん。なんぼ搾り出そう思ても出ん。ワシは痩れた手にじつぱい力をこめて古ぼけた戸を叩いた。

足を引きずつて歩くよつな足音が近づいてきて「口クか」とお爺の声がした。返事が出来んかったから、もつじつぺん戸を叩いた。ようやく戸が開いた。

出てきたお爺の顔を見たらワシはなんや嬉しくなつて笑つてしまた。

けたけたけたつ

お爺は眼をひんむいて「ひいっ」と声を上げたかと思つと、ばけもんにでも出くわしたような顔をして尻もちをついた。奥から顔を出したお母も、ワシを見るなり「ひいっ」と言つてぶつ倒れた。お爺は身を震わせながら土間にあつたつつかえ棒を掴み、ワシの腹をめいつぱいに突いた。今まで感じたことがない痛さがからだの中を走つた。

ワシは『』と後ろに転がつて、戸がばしんと閉まる音を聞いた。

「ば、ばけもんがー出て行け！ヤブ・・・ヤブへ帰れ！」

お爺が怒鳴った。

ワシはまたお爺に叱られた。

「ワシはもう、どこも行くところが無くなってしまった。雪の冷たいのなんか、もう、何も感じんかった。」

またタケナラシの所に来た。

真つ暗な竹ヤブの中、いつものようにタケナラシにもたれどる。降りてくる雪のひとつひとつがぴかぴかと光ってるみたいで美しいかった。

時々吹く強い風が、竹の枝に乗っていた雪をさらつていった。深く積もった雪の中、ワシは手を打ち合わせる。もうひとつも鳴らん。

タケナラシの花がそっと揺れて、

とびきり大きな風が吹いた。

ざわざわつ、ざわざわつとヤブ中の竹がひとしきり大騒ぎして、静まり返った。

ワシは立ち上がり、全部の全部を振り絞って、手を打ち鳴らした。

かあああん

またタケナラシの花が揺れた。

聴こえる。

タケナラシの竹が笑っている。  
ワシも一緒になつて笑う。

けたけたけたつ

## 五節（後書き）

最期まで読んでくださつて有り難う御座います。

竹藪に囲まれた地域に住んでいる僕は、竹や筍に親しんで育ちました。

竹藪の中では、あの乾いた「かこおん」という竹の音を聞く度、不思議な存在を想像せずにいたからです。

僕の原点である「竹」を描いたこの物語は、初めて書き上げた作品としてふさわしいものであつたと思つております。「こ意見」「ご感想など頂きたいと思つておりますので、宜しければお願ひします。

さて、実はこの話には続きがあります。Hピローグみたいなものです。

本編に含まれるとスッキリし過ぎるのではないかと、そんな気がしたので、後書きとして紹介させて頂きます。

=====

また春が來た。

村も竹の子の季節を迎えた。

「村はずれのところの口クが竹の子の妖怪に食われた。」という噂は、村じゅうに広まっていた。竹に花が咲くと、その年は凶作になると言われている。しかし、今年はどうこのヤブも竹の子がよく出でいるから、祟りだの何だのと言つて村の者は気味悪がっていた。そ

れでも質の良い竹の子がぽんぽんと出でてくるものだから、こいつの間にか皆「神さんの恵みや。」と言つて喜んで掘るよつになつた。

少し時が経ち、竹の子の季節が終わる頃。子どもたちが妙なことを口にするよつになつた。

子供同士で喧嘩をしたり、ひとりの子を除け者にしたりしていると、「あかあん、あかあん。」と、奇妙な竹の音がどこからともなく聞こえて来た、と言つたり。仲間に入れてもらえずひとりで遊んでいると、顔と腰が歪んだ竹の子の妖怪が遊んでくれた、と言つた。

無論、村の大人は誰も相手にしなかつたが……。

村はずれの口クのお爺とお母は、そんな話をきく度、雪が降つたあの日に居なくなつてしまつた口クのことを思い出した。

出来損ないだと罵つていた小さな子どもは、本当は心の優しい良い子であつたのだ。と、今になつて思うよつになつていた。ただ身体が不自由であつただけで、使い物にならないなどと思つていた自分を恥ずかしく思つっていた。口クの父親の代わりにしてやううと思つていたことを情けなく思つっていた。

「また口クやんに遊んでもるた。」と、村の子どもから聞かされたある日、口クのお爺とお母は竹ヤブへ出かけた。  
誰も手入れをしなくなつたヤブで、お爺が叫んだ。

「おひづ。口クづ。聞こえるかあ。」

繁つたヤブからは何の返事も返つてこない。

「ワシらが悪かつた。戻つて来おい。もうこつぺん箇で暮らそつやあ。」

しづめいへじいんとして、すぐそばで竹の音が鳴った。

あかあん、あかあん

涙混じりにお母が言つた。「そうかあ、戻つてこんのかあ。」

じおん、じおん

もう何を言おうが、それ以上竹の音は鳴らなかつた。一人は泣く泣くヤブを下りた。

じの村には妖怪が出る。  
とても優しい、竹の子の妖怪。

何十年、何百年経つても、子どもたちから妖怪の話が絶えないと  
は無かつたそうな。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8624a/>

---

タケナラシ

2010年12月23日14時22分発行